
昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

ちゃんこう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

【Zコード】

Z9940Z

【作者名】

ちゃんじつ

【あらすじ】

主人公は、どこにでもいるような学生の振りをしている

その正体は魔界で、漆黒の無双と呼ばれた魔法剣士

ある日、いつも通り学校に登校するが、校門の近くで異変に気付く
ものすごい数のガードマンがいることに・・・

そして、その中心にあたりには、魔界から逃げ出させてくれた恩人の王妃とその護衛の女騎士団がいた

無視をして、教室に入ったがいいが、最初の授業開始早々王妃が教室に入ってきて、私の王国を助けてくれと言つ

主人公は、いくら恩人の頼みでも一度は剣を捨てた

そのことから、一度は断るがドラゴンが現れるとなるとまた、剣を
とり王妃を守る

そのことがきっかけでまだ、主人公は現役、いや、むしろ昔より強
くなっていることを実感する

そして、王妃は助けだしてくれたら一緒に逃げてきた自分の娘をや
ると言い出す

主人公はもちろん断るが王妃は全然聞かず、自分の夫、王が病で倒
れて新しい王になれと言われ

強引に主人公は戦うことになった

もうちょっとだけ、戦うことを決意して・・・

この、小説は一話ずつ視点を変えたりするのでご了承ください。
一応、前書きで部分で誰視点かを書いたりしますので

一話（前書き）

今回は、かみさやけんじ神彩剣吾視点です

一話

さて、どうなつていいんだ？これは・・・いつも通り学校に登校しようとしたら、高級そうな車が止まっているその外にはガードマンが大量にいる・・・どうことなんだ？

俺には一つだけ心当たりがあつたが、俺はそれを無視し裏側の門から入った

【教室】

「なあなあ、あの高級車なんだと思う？」

友人が話しかけてきた

「さあな、誰かお偉いさんでも来ているんじやないか？」
「お偉いさんって来るわけないだろ？こんな学力とかいろいろ低い学校に」

「そうだよなあ」「一応話を合わせる

心当たりがあるが、もつそれは考へないこととした

キーコーカーコーン

音が割れているチャイムが鳴り響いた

「そろそろ、席に戻つたほうがいいぞ」「そうだな、戻ることに・・・」

ガラ！

教室の扉が開いた

先生か？と思つたが違つた

ヴィクトリア＝サーラ

昔、俺を助けてくれた王妃とその女騎士団がそこにいたついでに、サーラ王妃の外見は髪はピンク色のきれいな長髪で目は金色、あと背は女性の中で平均的だそして、サーラ王妃は俺の近くまで来てこういった

「神彩剣吾かみさやけんご・・・お願いです、私たちの国を助けてください」

・・・頭を深々と下げて言った
その瞬間、騒いでいたみんなが黙つて・・・すぐ騒ぎ出した

「おい！神彩！どういふことだよ！？」

友人が遠くのから話しかけてくる
頭を下げる人は王妃・・・だから王の妻だ・・・
俺はこの人とちょっとしたこと、て言つか俺を魔界から助けてもらつた恩があるから大抵のことには手を貸すつもりだが・・・
また、戦うのだけはごめんだった

「何のことだ？ていうかあんたたち誰だ？」

この平凡でささやかな幸せがある生活を終わらせたくない
だから、俺は知らないふりすることにした

この方法が一番いい

あっちだって、俺と会うのは7年ぶりぐらいだ
どうせ忘れているに決まっている

だけど、相手は・・・

「いいえ、剣吾……いや、またの名を漆黒の無双のこととは忘れたことはありません」

・・・あちやー完璧に覚えられているな
て言つた、その厨一病くさいのまだ覚えていたんだ
さて・・・どうこう風に対応しよう
そつ考えていた時だった

「王妃様・・失礼ですが本当にこの者が助けてくれるのですか?私にはただの凡人にしか見えませんが・・・」

おお・・・言つてくれるねえ
だけど、ここで反論するためんどうせこことになるから黙つておくが

「黙りなさい、ミララ。」この人はあなたなんか一瞬で倒すくらいの魔力の持ち主ですよ」

ミララって言うのか・・・サーラ王妃の後ろで剣を腰につけ、金髪でツインテール、目は青色の女は

「でも、私には感じることができないのです。この者の魔力が・・・

」

当たり前だ、てめえ程度に感じることができたらせつからく抑えてい
るのに意味がねえじやねえか
ていうか、周りが本当に混乱してきたぞ・・・どうすればいいんだ
?これ・・・

別の方をとるうと考えていてる時だった

「王妃様!――ばれました!――」

女騎士団の一人が後ろの方で叫んでいる

・・・女騎士団は見たところ、6人で教室の出入口をふさいでいる

その後ろの方から声がして・・・ばれた? ビリコリ」とだ

「お願いです!! 助けてください、剣吾・・・」「だから、なんのこと・・・」

ドオオオオン!!!!

逆・・・教室の扉とは全く別の方へ・・・窓がある方で爆発音が聞こえた

嫌な予感がする

「騎士団!! 配置につき、窓を開けろ!! 何としてでも、王妃に誰一人近づけるな!!」

ミララは叫んで騎士団を動かす

良い判断だな・・・窓がある、と言つことはガラスがはられてい。もし、そこから破片が飛び散りでもしたらけが人が出る

案外、強いのか? こいつら・・・俺みたいに魔力を抑えているたりして

「・・・隊長!! ドラゴンが・・・」

はあ・・・どうやつてきたんだよ!!

警官とか何してんだよ!! って、魔力を持つていらないやつに言つても無駄か

多分、姿すら見れてないだろ? なあ。と言つた、クラスのやつら[僕]と/orのやめる・・・ちゃんとそいつらはそいつらの仕事しているんだよ・・・お前らは見えてないけど!!

周りは変なものを見るよつたで見ていろ
さて・・・この間に逃げ・・・

「ギャアアー——オオオ——！」

！——・・・まじかよ！——

俺は教室の出入り口と全く別の窓の方に走った
まさか・・・本当にドワーフンが・・・いた

しかも、3体いる

まだ、少し遠いがブレスをしたら当たる距離だ
ちょっとやばいか？

騎士団のやつら剣しか構えていない
このままだと、全滅だな

・・・はあ、今回だけやるか

「はあ、サーラ王妃、今だけは助けてやるよ」

「本当ですか！——」

「召喚魔法・・・黒魔の騎士」

俺は7年ぶりぐらいに、黒魔の騎士の装備を召喚した

この召喚魔法は自動的に俺に装着してくれて便利だ。あと、サイズ
は唱えたもののぴったりのサイズになってくれる。まあ、ならなか
つたら7年前と同じ・・・恐ろしいな高校生が小学生の服を着るよう
なものになるから、絶対に会わない

ついでに、騎士だから剣もついている。わざわざ剣、単体で召喚す
る必要がない

まあ、刃がついていないから何も切ることができない剣だけど
ついでに、この装備は魔力がないやつだって見える

おかげで、クラスのやつらは目が点になつてい
る言い訳できないよな・・・

さて、さつせと終わらせて逃げよう
俺は窓から飛び出した

「おー……なにやつて……」

ミハラは俺に呼びかけるだけど俺は

「大丈夫だつて、俺飛べるから」

そう、俺は飛べる。昔からなぜか俺は飛ぶことができた
その方法を教えて欲しいとよく言われるけど俺は感覚だけでやって
いるからその方法を教えても誰も飛べなかつた
よし・・そう言えば、この技まだ使えるかな？

「スラッシュ！？」

俺は、技の名前を叫び、剣を振った
この技は、振った剣先から斬撃を飛ばす技だ。ついでに、一番威力
が弱い。あと、剣に刃がついていないと何も切れはしない
だから、威嚇程度・・・だけど十分だ
なぜなら、この技も俺しか使えない・・・未知の技を見たら逃げる
だろ

そう思つたが、スラッシュが予想より斬撃を強く飛ばしてしまい・・

「ギャアアオオ！」

ドロゴン、一体撃墜してしまつた

「（やつちまつた！――）」

できるだけ、傷つけたくなかったのに！

ていうか、死んでないよな！？

俺は殺しとかそう言つのは昔からなぜか嫌い・・つて言つが血を見るのが嫌だ

だから、俺は刃のついていない剣しか持つていない。昔から

多分打撲程度だと思うんだが・・・

昔と今じゃ、全然違うみたいだな
さつきのスラッシュを見ると

「ギャアアオオ！————！」

やば・・怒りだしたか？

でも、ドラゴンが野生でここに来るはずがない・・・多分、ドラゴンに誰かが乗つていると思う
引いてくれるだろうと考えていると同時にドラゴンたちは急旋回し、去つて行つた

・・・どこから、来たんだ？

魔界の門は人間界でも1個あるかないかだ

その1個がこの王妃様の王国にあつたはずなんだけど・・・

「国を助けてくれって言つたよな？王妃様」

「はい」

「何があつたか、一から話してくれ」

「わかりました。なら場所を変えましょ」

「助かる」

そつ言つて、俺達は教室から去つた

一話（後書き）

最後まで、読んでくれてありがとうございます。――

まだまだ、未熟ですが続けていくので読んでいってください。

あと、この小説を読んでわかりにくかったところがある場合は感想のところに書いてください。できるかぎり、読者にわかりやすくするために頑張りますので

I 話（前書き）

今回までは、パリ＝リヨン視点です

納得がいかない！！

なんで、魔力がないやつが空を飛んだり、ドラゴンを倒したりすることができるんだ！

女騎士団が成立して7年・・・最初からいる私からしてみればこの凡人は不思議すぎる。まるである時の教官みたいだ

女騎士団は、普通の騎士団と比べて魔力が大幅に高い。女王様を守るのも女騎士団しかできない

そんな名誉ある騎士団なのに、魔力がないやつに王妃を守られるなんて・・・あの教官に顔向けてできない

昔、私達の騎士団は子供の遊びで設立された

その男の遊び相手が教官だ。その人は尋常じゃないほど魔力を持っていて、どんなに私たちがくじけそうになつても手を差し伸べてくれた。

その人からしてみれば、ただの遊びだったかも知れないけど私たちからしてみれば遊びじゃなかつた

そして、私たちはその遊んだその日の内に王妃様に言いに行き、正式に騎士団となつた

私たちはうれしかつたけど、教官は騎士団成立を知らないいつの間にかいなくなつていた。

全員で町の人聞き込みをしたけど、意味がなかつたまるで鳥のように空に逃げたのかも・・・そんな考えもうかんなりしていた

あれから、私たちは教官に一度もあつていない

そう言えれば、一度だけ王妃様に訪ねた時に王妃様はこんなことを言つていたな

『あの人はあなたたちとはちょっと違つんです。だから忘れなさい』
つて言つていた

あの時の私達にはどういうことかわからなかつたけど今ならわかる

私はあの人に恋をしていたんだ。子供だからいろんな感情が入り混じつたりしてよくわからなかつた

ただ、それだけのことだ・・・もし、また教官に会えたなら伝えよう

『好きです』最初で多分最後の告白を・・・

【神彩剣吾の家 周辺】

・・・デカいな・・・

この凡人、まさかこんなにもデカい家に住んでいるのか?
ぱっと見ただけでも普通の家3軒ぐらいはあるだろう。

金持ち?なら、王妃様が訪ねてきた理由がわかる

経済的投資か・・・しかも、この凡人ドラゴンを撃墜するほどの力
があるみたいだ

その力で国を取り返し、そして経済もこのものの金でなんとかする
さすがは王妃様だ!!私達みたいなのは考えようもないことをし
てくれる

だけど、違つた

「おーい、みんなどうちを見ているんだ?こっちのアパートだぞ。
俺の家」

・・・へ?

右側をゆっくりと見ると、古臭いアパートが立つていて
どういうことだ?経済投資じゃないのか・

ますます訳の分からないことになってしまった

もつ、考えるのはやめよう。すべて王妃様に任せたら今は何とかなるだろ？

私はそう思いながら、神彩とか言つものの家に入ろうしたが……

「待つた、待つた。こんなにも入ることができるないんだこの家

「なら、どうするんですか？ 剣呑さま」

剣呑さま…わいつままで呼び捨てだったのに、王妃様がこの者に「わま」を語尾使う！？

その瞬間、私の何かが行動をさせた

「王妃様…」のものに「さま」なんて使わなくてよろしいです…。

私は鞘から剣を抜き、この凡人の首元に当てた
もちろん、切れるように刃を表にして

「おっと、怖いな」

嘘だ…この凡人は全然怖がっていない
その証拠に、剣を突き付けられて笑っている
本当にハツ裂きにしてやろうか？

そんな考えが浮かんでいた
だけど…

「やめなさい」、//リリ。さつきのこと忘れたのですか？

そうだ、よくよく考えてみればこの凡人はドリゴンをいとも簡単に
撃墜していた

ここで、ハツ裂きにしようとすれば逆にやられる

私はそう思い、剣を納めた

「でだ、この人數で人目に付かない場所・・あるんだけどどうする
?」

何を言つているんだ?「こいつ

そんないい場所があるなら最初からそこに行けばいいのこ

「いいですよ、その場所で」

王妃様は答える

そして、この凡人は手を叩き

「扉の魔法・・・ストラム」

その瞬間、凡人に目の前に現れた

その中は、綺麗な緑色が広がる大地だ

「さて、ここに入るにつれて注意があるんだが

「なんでしょう」

こじはちゃんと聞いておかないとな

仮にも私は騎士隊長、団で隊長つておかしいと思ひけど団長は決まつているから私はその下の隊長だ

だから、こじの団をちゃんと仕切るためにきいておかないと・・・

「こじにいるモンスターに絶対手を出さないでくれ

「どうしてだ?」

私は率直な疑問を聞いた

おとなしいからか？それとも、毒か何か持っているのか？
でも、どちらとも違った

「いや、単純にモンスターが強いから手を出さないでくれ。
おとなのめんどいから」
撃退す

「そうですか、わかりました」

王妃様が答える

・・・強いか・・・

まあ、この凡人は魔力を持つていないからどんなモンスターも強く
思えるんだろうな

その点、私達女騎士団は大丈夫だろうな

まあ、この凡人が頭を下げて助けてくれって叫んだら助けてやるか
そう思いながら私は扉に入つて行つた

【神彩 剣吾の扉の世界】

なんだ・・・外から見たのと変わりないじゃないか
綺麗な草原が広がっている

香りがいいな・・・すがすがしい気分になる

ずっとここにいたいなあ。そんな気分になつてきた

周りを見ると全員目を細めている。この気分を味待つてているのだろう
だが、2人だけ違つた。凡人ともう、1人新人の女騎士だけが目を見開いて周りを注意深く探つている

こんなところに注意するものなんてないだろ。現に王妃様も目を細
めている、いつも注意深いのに・・・
そう考えながら私は目をつぶつた

II 課題（前書き）

今回は、ヴィクトリア＝ミーナ視点です。

え！？え？

なんでみんな知らない土地にきて、そんなに警戒心なくいれるの？
ましてや、注意されたばつかなんだよ？

その人は私と同じで周りを警戒しているみたい
なんだろう・・・私、この人のこと知っているのかな？

最初に会った時から何か、懐かしいものを感じる
でも、気のせいよね、ずっと可愛がられていた私、サーラ母様の娘
ヴィクトリア＝ミーナ
外にも出たことないのに、知っているわけないじゃない

「なあ、お前名前なんていうんだ？」
「！？」

突然、話しかけられた
な、名前・・・そう言えば、まだ自己紹介していない。でも、自分がサーラ母様の娘っていうのは伏せておこう
まだ、この人を完全に信用したわけじゃないのだから
しかし、どうする？名前を変えるのも抵抗がある
どうしよう・・・

「あ、別に話したくないなら話さなくていいぞ？今、お前だけがま
ともだつたから話しかけているだけだしな
「え？」

私は目を見開いた
「ただけ！？騎士団のみんなは！？」

女王様を守る女騎士団、私も素性を隠しているけど女騎士団の一
だけど、みんなとは年季が違う

女騎士団設立からいる人もまともじゃない！！

現にミララ隊長も目を閉じていてる・・・嘘でしょ！？

私は鞘から剣を抜いて、この人に突き付ける

「どういふことなの？なんでみんな目を閉じているの？」

威嚇しながら聞く

この人は、確実に私達女騎士団より魔力がある
ドランゴンを撃退した。そして、扉を召喚した
何もかもがおかしい・・・いや、魔力が多くすぎるのかもしれない。
この人は・・・

一瞬でも警戒を解けない
もし、解いたならやられるかもしれない
だけど、この人は私を見ずに

「・・・やばいな・・・」

その一言だけ言つて飛んで行つた

嘘でしょ！？なんで私は見知らぬ土地で一人だけなの?
いや、正確には周りには、ヒルナやシーナがいる
隊長もいるけど、みんな目をつぶつて動かない。しかもたつたまま
どうしよう、ここで注意されていたモンスターが出てきたら
そり、考へている時だった

「ハハーー」

鳴き声が後ろから聞こえた
恐る恐る後ろに振り返ると・・・

イノシシが、立っていた

しかも、棍棒みたいなものを持つて

そして、その棍棒を振りかぶり私に・・・

当てるよう、振った

――ブン――

とっさに、私は剣でガードをしたが・・・

バキン

音を立てて壊れた

この剣は決してろくはない

ちゃんと毎日手入れをしていた

なのに、一撃・・・私の手もしごれて動かない

足もすくんで動かない

そして、イノシシは私の近くまで来て・・また、振りかぶった

私は目を閉じてしゃがんだ

そんなことで避けれるわけがない

だけど、とっさに体が動いた

なにもできない。こんなところで私は終わってしまうの?

ゆっくりと私にあた・・・

「はいはい、そこまで!――

え?だれ・・?

ドオオオン!――

近くで爆発音が鳴り響く
どういうこと?

イノシリの攻撃がいつまでたっても来ない
私はいつの間にか目を閉じていたその目を開けたら
イノシリが倒れていた。しかも遠くの方で
あんなにもぶつ飛ばしたのか?

私の近くにはあの人と女騎士団、あと家が建っていた
田をつぶる前にはこんなものはなかつた
・・・まさか

「！」まで運んであいつまで倒すの辛かつたぞ？」

本当にやつたんだ
こんな人間離れの技
すごい・・・なんて人なんだ

「さて、女騎士団とサーラ王妃を家に運ぶぞ？一応、この家、核兵
器使われても壊れないからな」

「・・・名前、なんて言つんですね？」
「は？」

突然だけど、気になつた

学校で一度サーラ母様が言つていいたけど、私は後ろの方にいたから
よく聞き取れなかつた

だから、もう一度聞きたい。この人の名前

「そうだな。今は漆黒の無双って名乗つておくが」

「どういうこと？」

「お前の国ではこっちのほうが有名だからな」

「知らないわよ、そんな名前」

聞いたことがない、そんな通り名みたいなの
どうして、この人は隠そつとするんだろう・・・まあ、いいや

「私の名前はヴィクトリア＝ミーナ」

「へえ、王妃様の娘か」

「驚かないの？」

女騎士団のみんなは私の正体を明かすと驚いたのに・・・
なんでこの人は驚かないの？

私は、生まれたことすら隠していたのに

「大きくなつたな・・・」

頭の上に手を置かれて撫でられた
気持ちいい・・・ただ、そんな気分になつた

「なんで小さい頃のこと知つているの？」

「お前は覚えてないかも知れないけど、一度だけお前と遊んだこと
あるぞ？」

「え？」

「どういうこと？」

子供のころ一回も遊んだことはない。いつも勉強や魔法のことをし
ていた
なのに、遊んだことがある？

「もつとも、お前はまだ赤ん坊だつたけどな」

そういうことか・・・でも、私を知つているんだ

何者なんだろう・・・この人

母様に頭を下げるせて、國を助けてくれって言わせたり、ドラゴンやイノシシを倒す力を持つっていたり・・・何もかもすゞぎる
そう考えながら、私は目を閉じようとしたけど・・・

「おつと、寝るなら。家に入れ。全員入れといでやるから」

「はい・・・」

私は家に入り、靴を脱ぎ、そして、書かれていた自分の部屋に入つて寝た

でも、私はまだ気づいていなかった。この家が見つかって少ししかたつてないのに、私の部屋がいつの間にがあることに・・・

四話（前書き）

今回は、かみさやけんじ神彩剣吾視点です

「あ、やつぱりこうなったか
扉の世界は、召喚したものの望みを反映させる場合が多い
俺の場合、眠たいだ・・・だから、ここに入れば妙な睡魔に襲われる
しかもだ、召喚したものの魔力で強制させられるから、大体は寝る
さらには、モンスターも召喚したもの魔力に反映される・・・
まあ、勝手に家が建つからいいだけど、いちいち場所を探さないと
いけないのがきつい
そして、眠たい

「はああ～～～」

大きなあぐびがこぼれる
ここで寝るわけにはいかないんだよなあ
とりあえず、女騎士団を全員この中に入れてその後で、国でも救い
に行かないとな
王妃様に頭下げられたら助けないわけにはいかないからな
さて・・・やるか

数分後

「これで・・・最後つとーー！」

1人1人、ソファに寝かせた
鎧を着ているけど、まあぐつすり寝ていいから大丈夫だろう
あとは・・・

「扉の魔法・・・ムラトスーー！」

開くのが、ストラム。閉めるのが、ムラトス……まあ、逆に読めばいいから楽だ

まあ、その場合、他のやつらは扉から出ないといけないんだけど、この場合は閉じ込めるから便利だ

俺の視界では、世界が歪む。そして、扉の外の世界……現実が現れる

ついでに、閉じ込めて24時間たてば自動的に召喚したものの近くに飛ばされる

よし・・・閉じ込めたし、ちょっと本氣を出して、国を・・・ラーシヤ王国を助けるか

ラーシャ王国は、日本から俺の速度で、3分程度……

さて……やるか……

【ラーシャ王国】

ドカアアアン！！

悲鳴が突然飛び交う・・・すべて、兵士の叫びだ
俺としたらこんなめんどくさいことしたくないけど、まあやつとこたほうがいいだろ

【王座】

俺はもう、到達していた

あの兵士たちは簡単に倒すことができた・・・正直、弱かつた

「アーラ王ー！奇襲です！ー」

「ついたえるなー！」この機会を待っていたんだろうー！あの女騎士団をつぶす・・・

「いえ！…敵は…」

そして、後の言葉を聞いたアーラ王は言葉を失った
まあ、たつた一人でここまでこれらたら誰でも失うだろ

「1人…・・・だと？」

「はい、しかも男との報告です」

「バカな！…そんなことが…・・・」

「ありえるんだよ」

俺は地上から壁になつていていた兵士たちを全員ぶつ飛ばして王様みた
いなやつに近づいた
さて・・・とりあえず、本当の王様助けるか

「何もだ・・・貴様！…！」

剣を引き抜き、俺に付きたてる・・・俺はその剣を一瞬にして折つた
そして・・・耳元でつぶやいた

「前の王はどうした？」

「と・・・とつぐに死んでる！…！」

死んでいる？まさか、女騎士団が去つた後に・・・

「私たちはここが女が仕切つていると聞いたから攻めてきたんだ！」

「！」

なるほどな・・・死んでいたのか・・・説明『苦労さん
なら、予定変更だ。助ける対象の王様がいないなら、国を助ける
俺は王の耳元でこういった

「ここに来た、兵士を連れてされ……一応、言つておくけど一人でも残したら首が飛ぶと思えよ?」

「ヒ・・ツヒイイ!—!—!」

醜い逃げ方をして逃げ去つて行つた

ボエエエエ!—!—!

・・・多分、今のが合図だな
兵士の魔力が移動を始めた
これで、表面的にはOK・・・
次は、捕えられている。元この国の兵士を助けるか
俺は弱つている魔力を探しだし・・・見つけた

【牢】

ここで、捕えらてているみたいだな

「あなたは?
・・・まあ、正義の味方かな?」

俺は鍵を探すのが面倒だったから。近くにあつたハサミを手に取り・
・・

「ちょっと、下がつてろ・・・スラッシュ!—!—!」

スラッシュで牢の柵を切り裂いた。

はあ、こういう時だけ切れる刃を持つておいた方がいいと思うな。
俺・・・

「あ、ありがたい。やっと家族に・・・」

「さつさ言つて言いふらしてくれ。国は救われたと・・・」

「は、はい！――」

みんな一目散に外へ出る

ここで、閉じ込められていたんだ。ストレスが溜まつたんだろう
さて・・・ここからは、王妃様の出番だな・・・

俺はそう思いながら、外へ出た。いつの間にか外は夜だ
通りで眠たいはずだ

俺はそう思いながら、王の家・・・城に戻った

そこから、無意識のまま王のベットで寝た

それが、俺の人生で一番、最悪で最高の出来事の始まりだった

五話（前書き）

今回は、かみさやけんじ神彩剣吾視点です

「はああ～～～」

俺はあくびをしながら起きた
外はもう、夕暮れだ
ベッド何かきつさを感じる

おかしいな、確か広いベッドで寝たはずなんだけどな
俺は目をこすりながらベッドを見直した
そしたら・・・

数人の女子・・・ああ、そう言えば扉にいれっぱなしだったな
24時間たつて出てきたのか・・・って、この国どうなったんだろう
一応、昨日の内に助けたんだけど、でもその後どうなったか知らない
ちょっと、様子見に行くか

俺はそう思いながら、部屋を出ようとしたり

その時、不意にドアが開いた

誰だ？

そこにいたのは・・・

「おはよおじやあこます・・・新しき王」
「は？」

俺は耳を疑つた・・・て言うか、目も疑つた

俺の目が正常なら目の前には、メイド姿の女性がいる

俺の耳が正常なら、メイドは俺のことを『王』と呼んだ
・・・あれ？

「ああ、起きましたか」

横から、サー・ラ王妃が出てきた

いつの間に・・・

てつをつべシドリこむと黙つていた

「どうしたことだ？ サーラ王妃？」

「いやー、あなたが王になってくれた方が安定しそうだから國民に言つちやつた」

・・・まずい！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！－！

サード王妃は酔つたら何をしてかすかわからぬ……
俺が最後に見た時、絡み酒になつていつてうつとうしかつた
と、とにかく、王になるのは「めんだ！」逃げないと……

「あ、ついでに、前の学校には退学届。住んでいた場所はもつ引き
払って、あと銀行に溜めていたお金はすべて寄付したから」

• • • • • • • •

金もない、住むところもない、学校も退学。どうせつて、これから就活すんだよ

「あと、私の娘の・・・」

「ああ、ミーナだつける

「そりそり、その子と将来的には結婚してもらいうから」

・・・何もかもがめちゃくちゃだ

「はああああ！？

「いやだつて、王族の人と結婚しないとのちのち面倒でしょ？」

「いやそりだな」と

一
舞の山川をめぐる二

・・・昔だけど・・・

「まあ、他に好物な子が一ぬつひとつなり……」

「諦めてくれるか！？」

二十一
緑川経

しまつた!! そう言えば、この国重婚OKの国だった(王のみ)
やばい!! すべての逃げ道をふさがれた!!

「一つ……聞いてもいいか？」

- なに? -

174

「え？ だつて丸一日あつたのよ？ できるに……」

丸一日？最低でもあの扉からは24時間は出てこれないはずだ···
ていうことは

「俺が、一日寝ていたのか！！！」

ヒーロー!! 正解

「いらねえよー！ そんな正解ー！」

「じゃあ、この書類にサインを……」「やつてられるか……」

俺は魔力を開放して、空を飛んで逃げよつと想つた
だが……

「……あれ？」

おかしい、何かがおかしい
体の何かがおかしい?なんだ?

「逃げられないわよ?だつて、寝てる間に……魔力吸い取っちゃ
つたから」

しまつた――――――! そりだ、この国、魔法関係なら世界一
俺の魔力を吸い取るのも造作もないはず
起きている俺ならなんとかするけど、寝ていたらなすがまだ!
つち! ! 奥の手を使うか?
いや、・・・この場合は、諦めたほうがいいか・・・
けどなあ、王になるものこやだ

「なんで逃げよつとするのよ?」

「ああ?」

「だつて、王だよ?自分の好き勝手にできるのよ? こんな千載一遇
「黙れ! ! !」

自分でびっくりするほどの大聲がでた
だけど、許せない……

「王妃……いや、サーラー! ! あなたはそんなふつて國を使つていていた

のかー?」

「ち、ちが・・・」

「違わねえだろーーーあんたは・・・」

「合格です」

「あー?」

どうこうことだ?合格?

「これで、文句はないですね?ミーナ」

「はい」

後ろから、声が聞こえた

まさか・・・この人達・・・

「試したのか?おれを・・・」

「そうです、ミーナがどうしてもつて言つから仕方なく・・・」

「その割には、俺の魔力を」

「だつて、逃げられたら駄目じゃないですか」

いつの間にか口調が戻っている

はめられた!!しかも、最悪だ!!

逃げられないし、はめられた・・・完璧に踊らされた
くそ、ちょっと考えればわかることなのに・・・

「だれか、助けてくれ――――――――――――」

五話（後書き）

次から、ちょっとわかりにくかったりするかもしれませんので、わざりにくかったらすぐさま言つてください。できるかぎり迅速に対応するつもりですので^__^

六話（前書き）

今回は、リリカルな視点です

はつ！－！聞いてあきれる！－！

まさか、魔法関係の問題が解けないとは、ふぬけだな
この凡人はやつぱり王になるには、駄目な存在なんだうつ

「はあ、体動かしてえ～～」

「駄目だ！誰が何のためにこんな基礎の問題をやつてこるとおもん
だ？」

私はなぜか教育係に抜擢されたばつてき

正直なところわざと終わらせたい。しかし、王妃様の命令では背
くことができない

まあ、私ができる限りはやつてやるつ

「つで、こんじまじこがわからないんだ？」

「寝かせてくれえええ～～～」

・・・やりすぎてしまつたか？

私が教育係に抜擢されて三日間ずっと眠らせずに勉強させているナ
ど、効率が悪いか？

人に教えたことのないのに、なんで私がこんなことをやつてこるので
だろう？

「・・・はあ、魔力も回復したし、本気で逃げようかな

「そうだ、良いこと考えたぞ」

閃いた、こいつが私を見下しているのと、こいつの体を動かしたい
とこう要求に見返ることができる考え方を

「私と一緒に打ちしないか？」

「・・・本氣で言つていいのか？」

目を見開いて、私に問い合わせる
ふん。そんな脅しが私に聞くか

「本氣だ」

「・・・まあ、準備運動ぐらいにはなるか」

なめられたものだな・・・仮にも私はこの王国では剣の達人として
名を知られている

そんな、私に準備運動ぐらい・・・ふふ、たのしみだ

ガキイイン！――！

「はあはあ・・・嘘でしょ？」

こんなにも強いのか？

今私・・・いや、私たちは戦っている

私達っていうのは、ここに来るまでこいつが女騎士団の暇なやつ
を誘い、一緒に戦っているが・・・こつちは6人いるのに・・・

「息ひとつ切れてないなんて」

「強すぎない?」この人・・・

近くにいる、マジシャン＝ヒルナも嘆いている

「はあー召喚魔法・・・ケルベロス!――」

ヒルナの得意な召喚魔法で最も強力なケルベロスが召喚される
首が三つに分かれている犬、速さも力も十分だ
これなら、こいつも多少は・・・

「・・・ケルベロスか・・・」

一子相伝の強力な魔法がこいつに襲い掛かるが・・・
「よつここつしょー!」

ドカッ!!

殴った!! 首の一つを殴り飛ばし、平然と立っている
そして・・・ケルベロスは消えて行つた

「え?」

ヒルナは何がおこったかまだ分かつていない
・・・くそ! - 「ここまで実力の差があるか?
私たちは女騎士団・・・あの人気が帰つてくるまでは、王妃様を守る・
・・絶対に!!

「はあ! - 女騎士団! - - - 一気に行くぞ! - !
「 - - - 「はい! - !」 「 - - -

私以外の騎士団が返事をした

それと同時に私たちは魔法を唱え始めた
6 方向からの一斉魔法攻撃
さすがに、これは防ぎきれないだろ

「・・・本当に、準備運動くらいか

ヒヨンー！

・・・え？

こいつが何かつぶやいてからいなくなつた
どこに行つた？

私は周りを確認すると・・・

「・・・」

ヒルナが田を見開いて空中を見ている
私もそれにつれてみると・・・

六話（後書き）

ありがとうございます！！！

皆様のおかげでこの小説のお気に入り登録が10件を超えました！！
それじゃあ、次回で・・・

七話（前書き）

今回は、かみさやけんじ神彩剣吾視点です

七話

「うひひひで、ちょっと差を見せつけておいてやるか
俺は空中に飛んで女騎士団の包囲を抜けた
そのまま、右腕を上にあげて・・・
唱えた

「火炎の魔法・・・火球」

ボツ！！

小さな太陽ができた
この魔法は、激しく自分の水分をなくす。まあ、太陽の近くにいる
のとかわらないからな
でも、力を見せつけるにはもってこいの技だ
下の方で、騒いでいる
・・・はあ、なんで俺はこんな国の中になつたんだろう
誰も、俺のことを信用はしていないはずだ
そこら辺から来たやつが突然王になつたのに、はいそうですか。な
んて言えない
まったく、サーラ王妃は何を考えているんだ
逃げようかな？

「うきげんよひ」

！！

「だれだ！！」

「おつと、それをこっちに向けないでください」

いつの間にか、近くにピエロみたいなやつがいる

・・・嘘だろ？全然気づかなかつた

いや、それだけじゃない。なんでこいつは飛んでいるんだ？

「見つけましたよ。神彩 剣吾様・・・いや、悪神佐々柄あくじみのささのがら」

「・・・だれだ？そいつ、知らねえな」

訳の分からぬことを言つてきた

・・・だけどわかることもある。こいつは俺を知つてゐるし、強い

「ふむ、自分が誰だかわかつてないよつです」

「・・・どういうことだ？」

「いえ」

ニヤリと笑つた

そして、ピエロの口が動いた

「すべての者に剣なる惡運じひを・・・」

「な！－！」

何が直観した

俺はこの魔法を知つてゐるかもしけない
いや、魔法ですらないかも知れないけど・・・
やばいことだけはわかる

「防御魔法・・・アガーダ！－！」

全体鉄壁魔法を唱えた

魔力がなくなつていくことがわかる

それもそうだ。だつてこの国全部にかけた

そして、空から・・・剣が雨のように俺と町に降り注いだ

「ふふ・・・そんなんちつぽけな魔法じゃ・・・だれも助かりませんよ?」

「・・・クソ!・・・召喚魔法・・・黒魔の騎士!・・・」

一瞬にて、召喚し・・・一気に!!

「うおおおおおおおお!――――スラッシュ!――――

全力で、降り注いでいる剣にぶつけた
そしたら・・・

「え・・・?」

消えた・・・降り注がれていたはずの剣が・・・

「残念・・・幻覚です」

「しま・・・」

ドス

・・・俺の体に何かが刺さつた。いや、貫かれた
俺は目が虚ろになりながらもそれを見た
そこには、強大な剣が俺の銅を貫き・・・
俺は・・・落ちて行つた

「・・・クスクス、さてこれから面白くになりますね」

・・・最後にピエロの声が聞こえたような気がしたが、俺の意識は
もつ遠ざかって行った

(後書き) 話六十

すみません> ま(——)(——)ま<
佐々柄あたりなのですが、正確には、佐々「のその」柄「がい」です

八話（前書き）

今回は、マジシャン＝ヒルナ視点です

何が起きたか、わからない

一斉攻撃を仕掛けようとした私たちは、簡単に避けられた
そして、避けた神彩が小さい太陽を作っていたが・・・突然現れた
ピエロに負けて落ちてきている

「召喚魔法・・・バード・・・」

私は得意のバードを召喚した

バードは人を運ぶことができる力持ちの鳥だ
落下している、神彩さまをなんとか支えないと・・・

「バードーお願い！！」

ほんの数分で、この国を救つたものが敗れた

・・・もしかしたら、私達騎士団は・・・弱いかもしれない
けど、この国を長年守ってきたんだ
この騎士団は、私はその騎士団で・・・戦つていきたい

【王の間】

「これは、一体何事です！？」

王の間には、王妃様がいる。その王妃様が見たこともないくらいの
驚いた顔で近づいてくる

団長が神彩さまを抱えている

ついでに、ピエロはいつの間にか消えていた

まるで、闇にまぎれるよつて・・・

「！」こつは、いきなり現れたやつに負けました」

団長が答える

団長・・・仮にもこれから王にこいつ呼ばわりは

「・・・う・・・」

「！」

田を覚ましたみたい！！
よかつた！！剣にさされている・・の・・・に

あれ？

おかしい、この人・・・誰だ？

「よかつた。剣吾・・田を」

「下がってください！…王妃様！…」

「え・・？」

立っているのがやつとの剣吾様・・・いや、この人は違う。剣吾様
とは何かが・・・

私の直感がそう呼んでいる

みんなは私を不思議そうに見ていいるけど・・・

「ふう。へえ、俺様の魔力でわかるやつがいるのか」

「だれですか？あなた・・・」

「はは、一応、剣吾だよ俺は・・・」

「違う！…あなたは剣吾様じゃない！…」

この人は驚いた顔をした

絶対に違う。剣吾様とは・・・

「ヒルナ、一体何を言つてゐるんだ?」

団長が私に問いかける

「団長は気づかないんですか?」この人の魔力・・・弱すぎませんか?」

「はー?」

気が付いたようだ

それと同時にみんなが剣を引き抜いた

「はつはーやつとみんな気が付いたか・・・さて、本題に移りつか
「貴様!何者だ!!答えろ!!!」

みんなが警戒している

しかし、この人はそれを者ともせずにしゃべり始めた

「本題はこうだ。俺にかかるな。ただそれだけでいい
「・・・へどうこうことだ?お前にか、剣吾にか?」

団長が質問する・・・で、何か団長、お前覚えているじゃないですか

「どっちもだ。あと、この傷の心配はしなくていい

私たちに見せつけるよつて、傷口を見せると、どんどんその傷がなくなつていつている

・・・どつこつ」とだらつて、「の人と剣吾様・・・一体どんななかわりが・・・

「さて……言つ」と言つたし、俺はもう魔界に消えるは
「……残念だつたな。魔界への門は私達全員の魔力を注がないと
開きはしないぞ」

そうだ、私たちは契約の元で魔界の門を封鎖している
魔界とは戦争中だが、戦力があまりにも大きすぎるため今は封鎖し
ている

「だれが、わざわざ、魔界の門を使つて言つた?」
「……どういうことだ?」
「こういうことだ!」
「黙りやがれ!……このクソ野郎が!……」
え・・・?なんだこの状況は・・・?
目の前に剣吾様がいる。一人も・・・
1人は、傷口がふさがっている剣吾様の形をしているもの
もう一人は・・・

「俺の体を好き勝手しているんじゃねえよ!……」

黒い鎧に包まれている。剣吾様だ
これは・・・一体、どういうことだ?

九話（前書き）

今回は、かみさやけんご神彩剣吾視点です

「これは、一体どういうことだ？」

剣に刺された俺はそのまま下に落ちた。そして、気が付くと周りには誰もいらず、俺一人だけだった

傷口が開いてはいたが、そんなこと気にもせずに帰ると俺がいた俺の形をした、別の魔力の俺が・・・

そして、やつと気が付いた。今の俺は、魔力体・・・魔力だけで動いている

何がどうなつてこつなつたかは知らないけど、このままじゃ魔力を消費していき俺は消える
・・・やるしかない

「おいおい、せっかく全員殺すチャンスだったのに
「悪いな、だけど俺の体でやるな！……」

答え返すとともに、切りかかる

本気だ、早く自分の体に戻らないとどんどん消えていく
幸いにも俺の魔力は高いから、消えるまでは時間がかかるはずだ
しかし、いつ消えるかはわからない・・・早く戻らないと・・・

ズシャ

「・・・自分の体なのにいいのか？」
「別にいいよ、俺の体ぐらいな」
「本気か。なら・・・」
「私達を無視するな！..」

ブン、ゴオオオ！！

俺の体が一瞬にして、火の海に飲み込まれた

「お前が本物だな？」

ミラフが聞いてくる

まあ、こんなことが起きたから恐いんだろうな

「ああ、そうだ・・・だから、手伝ってくれ」

「断る」

・・・まじかよ・・・

「じゃあ、王としての命令だ」

「断る」

・・・じゃあ、どうしようと？

「私たちは・・・王妃様を守る！ただ、それだけ・・・」「じゃあ、王妃様を連れて逃げる。こいつぐらい俺1人でいい

「何をいう？もう、相手の魔力が風前の灯じゃないか」

確かに、感じるとこでは、魔力がもう少ないが・・・

「・・・いやな予感がすんだよ」

「ただ、それだけで私達を逃がすのか？」

「ああ、だからさつさと」

「安心しろ。止めはしない」

火の海に向かつて走り出した

多分、あいつは俺の体を縛つて動けなくなることだ
ミララが飛び込むと同時に全員が・・・

「待つてみんな！！」

いや、2人だけが飛び込んでいない
確か、名前がミーナとヒルナだ

あの二人は他のやつらと比べてまだ危険察知能力か魔力探知が優れ
ているみたいだな

「ミーナ！ヒルナ！！お前らだけでも、王妃を守れ！！
「でも、みんなが・・・」
「俺が全員助け・・・」
「うああああ！！！」

人が・・・いや、女騎士団の一人が俺の方に飛んできた

ガシツッ！！

「きやあ！」

「うーー！」

くそーー魔力体だから力が入りにくい
俺は受けとめたのはいいが・・そのまま転がつてしまつた

「召喚魔法・・・ゴブリン！」

ドン！

止まつた！！

どうやら、何かにぶつかつて止まつたみたいだ

「ゴフウ・・・」

「ん・・?」

俺は見上げると・・鬼の顔があつた・・・

「うああああ！――！」

「ちょっとーーそれ、私のゴブリンですーー！」

・・・あー！そういうことか

ヒルナが召喚してくれたから止まつたけど・・・さすがに至近距離でゴブリンを見たらだれでもビビるって

「じゃあ、ゴブリンすまないけどこいつ頼むは

「ゴフウ

うなずいてくれた

それをOKと思つたので抱きとめた騎士・・・シーナを手渡す
そして・・・

「とにかく・・・火の海を蹴散らす！―スラッシュ―！―！」

ブン！―

技だから魔力は減らない・・・だが、わかる

この黒魔の騎士を召喚しているから、どんどん魔力がなくなつていいだんだん、体が淡く光りだしてきた
早く、早く・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9940z/>

昔、魔界で無敵と呼ばれた魔法剣士が一国の王となりました

2012年1月8日18時54分発行